

# お金をめぐる冒険

～経済の仕組みがよく分かる講座～

第1回「お金入門」

ゲゼル研究会会員

青木 秀和



# お金をめぐる冒険

## ～ 経済の仕組みがよーく分かる講座～

### 第1回 「お金入門」

#### お金って何だぁ？

お金って、一体に何なんでしょう？ 案外、そのことを真剣に考えたことはないのでは？ 「お金のことを考えると、なんとなく憂鬱。お金のことばっかじゃ、やっぱダサイ。世の中、お金だけじゃないよ。でも、お金は欲しいよ。お金はいくらあっても、邪魔になるものじゃないし…。あれば、あるほどウレシイし…」なんてところが本音なのでは？

昔から偉い経済学者さんたちでも、「お金って何者だ？」と悩んできました。その悩んだ過程を哲学者の内山節さんが『貨幣の思想史 - お金について考えた人びと -』（新潮選書）に要領よくまとめられています。（でも、はっきり言ってこの本はかなり難しいです）

それで、内山さんの結論は、「貨幣は、つねに外部のものとして成立し、それが内部に介入してくるかたちで、有用性の貨幣化という虚構をつくりあげていく。交換の必然的結果として貨幣が生まれたのではなく、貨幣が生まれ、介入してきたことによって、交換が貨幣化されたのである」「そうである以上、貨幣は、貨幣が生まれたことによって、貨幣として成立したという説明が、貨幣についての一番納得のいく説明だということになる」（234 ページ）

つまり、「お金は、お金だから、お金なんだ」ということ。

なんだかよく分かりませんね。その分かりにくさの最大の理由は、お金が「虚構」の存在だからです。（「嘘」という人聞きが悪いですかね。「制度」と言うなら多少格好良く聞こえますか？）人間が頭のなかで作り出したものだからです。いかなる実体も持ち合わせていません。

だから、お金のことを考える場合、実際にお金が果たしている役割を考えることから始めたほうが、現実的ですし、考え方も比較的整しやすいということになります。

ふつうお金には三つの機能があるといわれています。

交換手段の機能      価値の保蔵機能      価値の尺度機能

と『エンデの遺言 - 根元からお金を問うこと -』（NHK出版）に出ていました（229 ページ）。次にこの本を手がかり、もう少し話を進めましょう。

## 借金の本質

「お金は交換する力を蓄えておく手段でもあるのです。値打ちをお金の形でもっていれば、支出を先延ばしすることもできます。人は一つのお金をつくったつもりでいますが、実は二つ、創造してしまいました。交換に役に立ち、これを促進し経済の血液の役目をするお金が一つ。もう一つは値打ちを減らさず、価値を保蔵し、場合によっては貸し付けて値打ちを増すもの。前者は公共の道路のように必要になったら利用し、不用のときは自分の手を離れるものです。後者は貸し付けによって社会が生産したり提供する財やサービスに、利子という請求権を与えるような機能です」（229 ページ）

ああ、そうなんだ、お金は貸し借りが出来て、しかも借りると「利子（利息）」というものを払わなければいけないんですね。もちろん、他のものでも「増やして返す」ことを条件に借りることはしばしばあります。例えば、江戸時代には小作の水飲み百姓は庄屋さんから種籾を借りて秋になったら年貢という形で増やして返さなければなりませんでした。だけど、この場合は、人間と自然が協働作業をしてみさに自然に収穫物を増やすことが出来ます。少なくとも、その「可能性」はあります。

ところが、お金の場合、この「可能性」（＝自然に増えるという可能性）は、些かもないのではないのでしょうか。財布の中に入れた1万円札が明日になったら何もしないのに、あら不思議、2倍になっていた、というようなことが起こればウレシイけど、そんなことは現実にはあり得ませんよね。

さて、借金をすると当然のように付いてくる「利子」、何故、その「利子」を払わなければいけないのでしょうか？

経済学的にはどう考えるのか、その説明を聞いてみましょう。

「お金の借り手から見れば、利子はお金の借り賃です。貸し手から見れば、お金を貸したことの報酬です。...例えば、百万円というお金を貸した人は、借り手から借用書を受け取りますが、しばらく百万円というお金えを使えなくなります。つまり、流動性（すぐに「使える」状況・可能性 - 引用者注）を失ったこととなります。他方、お金を借りた人は、手元に入ってきた百万円をすぐに使えるようになります。つまり、流動性を手に入れたこととなります。

このように考えると、利子は流動性を失うことの見返り、逆に言えば、流動性を手に入れるためのコストと捉えることもできるでしょう。銀行預金でも、普通預金などいつでも払い戻せる預金は流動性が高いため、それにつく利率は低くなります。そして、半年、一年と預けなければならず、そのために流動性が低くなってしまふ定期預金は、利率が高めになります。」（小塩隆士『高校生のための経済学入門』ちくま新書 154～155 ページ）

そして「お金に対する需要が強まれば利率は高まり、お金に対する需要が弱まれば利率は低くなります。ただし、それは相対的な話です。いくらお金に対する需要が強くて、お金が十分供給されていれば、利率は高くなりません。利率は、お金に対する需

要と供給のバランスによって決定します。これも一種の市場メカニズムです。」(156 ページ)

なかなか説得力がある上手な説明です。「非の打ちどころ」がありません。

でもちょっと待ってください。私たちが「預金」する場合はたしかにこのとおりかもしれませんが「借金」する場合はどうでしょう？

私たち一般庶民には、貸し手が示す「金利条件」を受け入れるかどうかの選択肢以外にないのではないのでしょうか。そして、お金に困れば困るほど(ちょっと気取って言うなら「手元流動性」が不足すればするほど)貸し手の「言いなり」になるしかありません。そのような状況に追い込まれると金利は「相対的」なものではなく「絶対的」なものになってしまうように思います。

上の経済学的なきれいな説明は、庶民感覚から何かしらズレているような感じを抱いてしまうのは、私だけでしょうか？

では、何故、「利子」が払えるのでしょうか？続きを聞いてみましょう。

「なぜ借り手は利子を貸し手に支払うことができるのでしょうか。これは、借り手が手に入れたお金を活用して、例えば新しい機械を購入し、製品を生産・販売してもうけを得ることができるからです。また、長い間お金を借りれば、それだけもうけを得るチャンスも増えるので、返すまでの時間が長いお金ほど高い利子がつきます。逆に、お金の貸し手から見れば、手元にお金を持っていれば得られたはずの収益獲得のチャンスをみすみす手放すわけですから、その見返りとして借り手に利子の支払いを要求することになります。」(155~156 ページ)

「利子を貸し手に支払うことができるのは、借り手がもうけを得ることができるからです」う~む、こう言われるとアタマが混乱してきませんか。

お金を借りて「返せない」ことなんて日常的に起こります。「もうけを得」て、利払いができるかどうかはやってみなければ分からない。

もちろん最初から返す気がなくて借金するのは「詐欺」で、これは犯罪行為です。でも特定の条件の下では法律も「返済不能」をむしろ是認していますよね。ほら、日本だって会社整理手続、会社更生法や民事再生法、個人版民事再生手続など「破産法制」が整備されているでしょう。

このような「破産法制」が適用されるような状況では、たいてい利子どころか元金すら返ってこないことのほうが普通です。この場合、その「返ってこなかった」元金は、貸し手から借り手へタダであげた資金「贈与」となり、「返ってこなかった」利子に関して貸し手は「マイナスの利子」を払っていることになるんじゃないでしょうか？

それはともかく、借金が返済できるどうか、利払いができるかどうかはかかって「借り手」の資力によって左右される問題であって、「貸し手」にはまったく関係がないことではないですか。

ですから、利払いが「何故、できるのか」という問いには、どういう場合に払えるか、その「条件」や「利子源泉」にまで言及しないと論理的一貫性が保てない。そうじゃないでしょうか。

もし現代経済学が「投下資金は必ず回収できる」という前提で理論を組み立てているなら、現実の社会経済と大きく乖離してしまうように思います。それでは「貸し手（側から見た）」経済学のみがあって、「借り手（側から見た）」経済学は存在しないことになりはしないでしょうか。

現状のように、不良債権つまり「返って来ない借金」が大量発生し、それが足を引っ張って不況が長期化しているにも拘わらず、経済学者は百家争鳴状態でその誰もが有効な解決策を提示できなくなっているのは、こんなところに原因があるように思いますが、どうでしょうか。

## 借金は所詮借金

いまのアメリカの経済は、個人消費によって下支えされていますが、その個人消費がじつは借金に頼りきりになっているのです。具体的には、ミニマム・ペイメント（月々、借金残高の2%程度を支払えば、それ以上の支払いが猶予される）や、リ・ファイナンス（担保価格が上がった住宅に担保を上乗せしてさらに付けて、またまた借金する）なんかを利用してお金を借り出して消費に使ってしまうのです。

借金に依存して景気を上昇させるという、このアメリカ流のやり方がヤバイのを、あのバブル経済を経験した日本人なら知っているはずですが、NHKの総力特集で「土地はだれのものか」というのがありました。それが一冊の本になっています。今となれば、バブル期の世相や人々の考え方を知ることができる貴重な資料となっています。そのなかに次のようなやり取り出ていました。

いってみれば、土地の値上がりで、担保力が増したというわけですね。  
「そうなんです。含みの増した土地を担保にオカネを借り、そのカネでまた土地を買う。そうやってどんどん増やせるわけですよ」（司建物・川又社長談 - 引用者注）（『土地はだれのものか』日本放送協会）

でも、こんなやり方は長くは続きませんでした。もう一度、内山節さんに登場していただきましょう。

「最近になって私たちが経験したいわゆるバブル経済は、このこと（＝虚構の貨幣が実態をもつようになること - 引用者注）を象徴していた。株価も土地価格もいかなる実態ももってはいなかった。投機的な活動が、その価格を生んだだけである。ところがバブル経済の頃は、この虚構の価格が生まれることによって、それが経済を現実にかかしていたのである。虚構の価格は実態へと転化していた。」（『貨幣の思想史』236ページ）

この「虚構の価格」を実態へと転化させた原動力が「借金」だったんですね。そもそも実態があった訳じゃない。架空の取引価格が成立して、それを元に架空の担保価格が設定されて、実態を伴わない借金が途方もなく積み上がっていきました。

しかし、「借金は所詮借金」でしかありません。いつかは返済しなければいけません。でも、中味は何も無いわけですから、そんな借金が返せる道理がない。それで天文学的な数字の「不良債権」が大量発生したわけです。

借金の本質は、お金を増やして返すこと！それができなければ、破産するだけ！ なのですから、お金を貸した金融機関に戻ってくるはずお金が返ってこず、金融機関自体が「債務超過」（略していえば、預金者に払い戻すお金が足りなくなった状態）に陥り、「金融不安」が一挙に広まったのです。

負債というのは、実入り、つまり現金収入からでないとは返済できません。借金して返すようになると、負債は自動膨張を始めてしまいます。何故なら、その時払う「利子」は常に「新しい借金」となって累積していくからです。これは簡単な理屈なのですが、案外、見過ごされているように思います。

ODAなど途上国「援助」でも同じで、援助を受ける国の経済が援助を受けた後、内需が拡大することで「余剰」が生まれにくい限り、借金を返すために新しい借金を必要とするか、国内経済を萎縮させて強引に返済資金を捻出するしかなくなるのです。これが援助の逆説「援助が作る貧困」のメカニズムです。

「こうして債務を多重に膨らめ、総債務を返済するには逆に莫大な収入を必要とするようになる。

その裏側では資金の貸し手がそれと同額の「金融資産」を見かけ上持つことになる。しかし、その金融資産は借り手の返済能力を超えた瞬間「資産」の実を失う」（青木秀和『公共政策の倫理学』（丸善株式会社）167～168ページ）

国内に金融資産が幾らあっても、それだけでは「豊か」と言えないのです。問題はその金融資産がどれだけ回収可能性を持つのかということに帰着します。いくら見かけ上、大きな貸し金があっても、返済されなければ、そんなモノはただの紙切れにすぎません。そして、その可能性は借金の額が大きくなればなるほど大きくなっていくのです。国民金融資産1400兆円というのは、それだけで戦慄すべき事態なのです。

「『恐慌』というのはじつは不良債務の一括処理過程のことで、資本主義経済に内在的に備わっているメカニズムなのである。カネという燃料を金融というエンジンで爆発させて推進力をつける資本主義経済は、いつか債務超過というカベに突き当たらずにはいられない。アメリカ標準の金融自由主義は債務超過を世界的規模で各国経済に植え付けてきた。それが一挙に露呈してきているのである。しかしこの債務超過を解消しない限り、世界経

済は次の段階には行けない」（同前『公共政策の倫理学』158 ページ）

おそらく、もう実質的には「恐慌」状態に突入しています。それは資本主義経済の宿命、自然の成り行きなのです。あとはそれが何時、一気に表面化するのかだけ、「時間の問題」なのです。

というわけで、今回の締めくくりとして、内山節さんのまとめを引用しておきます。

「虚構の貨幣経済が、虚構の貨幣システムを自動律のように作りあげていく。だがここでも、貨幣の本質を忘れてはならない。虚構の貨幣が実態をつくりだすという本質。虚構の貨幣システムと関係を持つことによって、人間たちは、実態経済をつくりだし、生活という実態をつくりだす。それが、顛倒したものであろうとも、なかろうとも」（『貨幣の思想史』237 ページ）